

## ロンドン旅行記(その 5)

**[Wigmore Hall]** 駐在時に家族4人で行った演奏会は、ロイヤル・フェスティヴァル・ホール（モーツアルトのヴァイオリン協奏曲 3 番、ブラームス交響曲 1 番）、バービカン・センタ（バッハ 2 つのヴァイオリンのための協奏曲、モーツアルトピアノ協奏曲 21 番）、ロイヤル・アルバート・ホール（王立音楽院設立記念。ショルティ、パールマン、バレンボイムとか、登場人物はすごかった。結婚から 2 年目くらいのチャールス・ダイアナのカップルも臨席。）など。アルバート・ホールには一人でウィーン・フィルの「ジュピター」と「英雄」を聞きにいった。最晩年のオイゲン・ヨッフムの指揮。

今回の旅行目的には、オペラやコンサートは入っていない。従い、上記のホールで丁度演奏会がなくても落胆はしなかった。でも万一のことを考えてダークスーツは持ってきたのだ。そうだ **Wigmore Hall** へ行ってみよう。Hotel から歩いて 4 分だ。ここへは家族で複数回来たことがある。日曜日の 11:30 からの **Coffee Concert** で演奏時間は短く格安（現在は 10~12 ポンド -1 ポンド=133 円）。中休みはないが、演奏前か後に **Coffee** かその他の飲み物（入場料に込）が飲める。ヴィヴァルディの「四季」を聞いたのはよくおぼえている。

17 日(水)の昼に行ってプログラムを見たら毎晩演奏がある。新進音楽家もいるためだろう。夜の価格はだいたい 15~30 ポンドで、中休みあり。ここは 540 名収容のリサイタル・ホールで独唱、独奏、室内楽用。**Big name** はあまり登場しないと思っていたのは僕の誤解。11 月のプログラムだけでもピアノのブレンデル、チェロのイッサーリス、ソプラノのキルヒシュラーガーなどの名があった。

今回ロンドン最後の夜 18 日は「ロンドン・シンフォニー・オーケストラのソリストによる室内楽」12~26 ポンドの中から 22 ポンドの切符を買った。前から 2 番目の列の真中だ。

今回の曲は(1)プロコフィエフの 2 つのヴァイオリンのためのソナタ。(2)モーツアルトの弦楽五重奏曲第 5 番 K593。(3)ブラームスのクラリネット五重奏曲演奏者はヴァイオリンがロシア出身とブルガリア出身の男性。ヴィオラがイスラエル出身の女性とロシア出身の男性。後者はクラリネット五重奏曲のときは出ず。チェロがリトワニア出身の女性。いずれも 30 歳代前半？

クラリネットは英国人で 50 歳代後半。**London Symphony Orchestra** と言っても、このように多国籍軍。素人目にはクラシック音楽の世界は実力があれば、（運もあるだろうが）人種差別なく活躍できるように見える



館内のバーはベヒシュタインの名前を冠している。なぜか調べてみた。このホールはドイツのピアノメーカーであるベヒシュタインの所有で Bechstein Hall という名前だった。第一次大戦で敵国財産として没収されピアノなどは二束三文で売却されたという。名前が Wigmore Hall に変えられ、ピアノも Steinway に置き換えとなったそうだ。

← 三角屋根の下がホール入口。左はホール・レストランの食事メニュー。右下は演奏会の今月のメニュー。



なつかしい【舞台の上の円天井】 - **Seoul of Music** のラファエル前派的浮き彫り

僕には演奏を批評する力はないので、曲そのものの印象を書くことにする。

### **[プロコフィエフの2つのヴァイオリンのためのソナタ]**

初めて聞く曲。中学3年の最後、高校受験の直後、試験結果発表前に学校で連れて行ってくれたソ連のバレエ映画「ロメオとジュリエット」以来プロコフィエフが好きになったが、他に聞くのは古典交響曲、アレキサンドル・ネフスキー(映画音楽によるオラトリオ)、3つのオレンジへの恋(オペラからの抜粋管弦楽)くらいで、実は交響曲、協奏曲、室内楽はあまりよく知らない。

ヴァイオリン・ソナタといってもピアノはない。他の作曲者（誰かは分からない）の 2 つのヴァイオリンのためのソナタを聴いたプロコフィエフが「同じような構成で聴衆をあきさせない、もっとましな曲が自分にはできる」といって作曲したもの。ソ連へ帰国する直前フランスで作曲した中期の作品。緩・急・緩・急の 4 楽章。第 2 楽章は 2 つのヴァイオリンの丁々発止の掛け合いが面白かった。第 3 楽章にはロメオとジュリエットを髣髴させる甘美なところがあった。第 4 楽章の諧謔味は古典交響曲に通じ、時に 20 世紀初頭のフランス音楽の影響を感じさせるところもあった。

### [モーツアルトの弦楽五重奏曲第 5 番 K593]

モーツアルトの弦楽五重奏曲は 6 曲ともすべて何度か聴いているから、この曲は知っている。第 3 番（ハ長調）と第 4 番（ト短調）がそれぞれ交響曲第 41 番（ハ長調）と第 40 番（ト短調）に比べられ、6 つの弦楽五重奏曲のベスト 2 というが、この 5 番（ニ長調）は第 3 番に劣らず好きだ。第 4 番のような強い印象[注]は与えないかもしれないが、全体に透明感がある。

第 1 楽章：不遇な年の作曲というが、力強さを感じる。

第 2 楽章：心の平安。

第 3 楽章：優しく、クラリネット五重奏曲（イ長調）に相通じるなつかしさ。

第 4 楽章：軽快な躍動感。

この曲にはチェロの存在感がある。

- 20 分の中休み -

### [ブラームスのクラリネット五重奏曲]

渋いと言われるブラームスだが、高校時代からだいたいどれも好きだった。4 つの交響曲、ヴァイオリン協奏曲、ピアノ協奏曲、大学祝典序曲、ハイドンの主題による変奏曲など。でもマゲローネのロマンスとかドイッチェ・レクイエムは熱中するところまではいっていない。クラリネット五重奏曲も自分にとっては、どちらかというと後者の部類。

この曲とモーツアルトのそれとがクラリネット五重奏曲の二大名曲といわれ、CD でもこの 2 曲が対になっているものが多い。僕はモーツアルトのものが甘美で明るく大好きで、昔の言葉で言えば A 面あつかい。ちょっと暗いブラームスの方を B 面扱いしてきた。CD に A 面・B 面などないけど。つまり漫然と聞いていただけで、まじめに聴いたのは今回の演奏会が初めてといったらよいかもしれない。

**第 1 楽章：**弦にくらべてクラリネットの自己主張が弱い（演奏でなく曲そのもの）という印象はなま演奏を聴いてもかわらなかった。この楽章は一番好きであることに変わりはないが。

**第 2 楽章：**東洋的。昔、福田蘭童が尺八で「笛吹き童子」の横笛のつもりを吹いていたが。あれを思い出させるクラリネットの音色があった。ジプシー音楽の影響だね、きっと。

**第 3 楽章：**ハンガリー音楽（コダイ、バルトーク）を思い出した。

**第 4 楽章：**悲しい。

夜 9 時 30 分終演。満足・満足。明朝は 5 時 50 分ホテル・チェックアウトだ。ホテルは近いし、早く帰って寝よう。酒飲みは「なんで PUB へ行かないんだ」と思うでしょうけどね。駐在中はつきあいで行ったことは何度もあるけど、一人じゃねえ。

#### [その 5 終わり]

[注] 「4 番第一楽章を小林秀雄が『疾走する悲しみ』と言った。」という誤った説明が一部にある。アンリ・ゲオンがこの曲を「駆け巡る悲しみ」と書いたのをまたは援用して、小林は（どの曲をさしてか分からないが）「悲しみは疾走する」と書いたようだ。僕自身「小林は交響曲 40 番のことを『疾走する悲しみ』と書いた」と思い込んでいたので、「え、弦楽五重奏曲第 5 番のこと？どっちなんだ？」と疑問に思い、調べたら上記の事情が分かった次第。この文章は第 5 番のことで、第 4 番は関係ないのだが、メモとして残しておく。